

令和 3 年 4 月 15 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02277

研究課題名（和文）新教育運動における自己と公共 「社会への開かれ」の視点から

研究課題名（英文）Self-Understanding and Public Spirit in New Education under "Openness toward Society"

研究代表者

伊藤 敏子 (Ito, Toshiko)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：20269129

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツ新教育運動に端を発する教育の系譜を精査し、「地域」を想定する「社会」への開かれ促進する教育実践を「既存の社会を相対化させる前提」をなす自己理解と「既存の社会に適応させる前提」をなす公共心育成の交差点としての「社会」への向き合いという枠組みで捉えることで、新しい学習指導要領の根幹をなす「社会に開かれた教育課程」という理念と新教育運動の理念の親和性とともその可能性と問題点を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで等閑に付されてきた新教育運動における「自己理解」と「公共心育成」の絡みを明らかにすること、その帰結に鑑みて「社会への開かれ」を意識した教育の在り方を析出することは、学術的な意義を有する。20世紀初頭の戦間期に展開した新教育運動が目指した教育と21世紀初頭の「社会への開かれ」を謳う学習指導要領が目指す教育は、いずれも予測不可能な時代に効力を発揮する社会との関わりの在り方を意識する点で強い親和性を示す。この親和性に着目することで「社会に開かれた教育課程」という理念の可能性と問題点を浮き彫りにすることは、社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：Educational practice under the slogan "openness toward society", which has attracted considerable attention since the adoption of the new Japanese Curriculum Guidelines, had once been a matter of concern in New Education. According to educational theorists of the interwar period, educational practice was required to open up to "society", which was said to exist at the intersection between self-understanding (relativizing of existing society) and public spirit (adapting to existing society). In this regard, the legacy of New Education prefigures the possibilities and the limits of educational practice under "openness toward society" in an age of unpredictability.

研究分野：教育思想

キーワード：社会への開かれ 新教育 自己理解 公共心育成

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究者は平成 10 年代半ば以降、新教育運動について「感性教育」と「身体教育」に焦点化された思想史研究を進めてきたが、平成 20 年代半ば以降は学校から職場への「移行」に関わる言説の研究も行っている。二つの研究テーマを並行して追求するなかで明らかになったことは、新教育運動を継承する教育が今日、日独いずれもその構想において学習者の主観への働きかけを前景化しているにもかかわらず、その帰結においては教育者側の意図と学習者側の認識の相関に顕著な相違がみられることである。

(2) 新しい学習指導要領は「社会に開かれた教育課程」の重要性を確認しているが、これは学習者の多くが将来、現時点では存在しない職種につき、現時点とは異なったかたちで公共に向き合うことを想定しており、自己と予測不可能なものとしての社会を結びつける能力の獲得を強く意識した表明といえる。ここに、予測不可能なものとしての社会を今日と同様に強く意識していた新教育運動における「自己理解」と「公共心育成」の絡みを精査することを通じて「社会の変化の受け止め」と「社会への開かれ」という課題に取り組む教育の可能性を探求するという研究への関心を抱くようになった。

(3) 新教育運動をテーマとする研究は、その理論上および実践上の意義について今日にいたるまで多くの成果を生み出してきた。しかし、新教育運動における「社会の変化の受け止め」と「社会への開かれ」の構想と帰結を検証することで、予測不可能な時代に効力を発揮する社会としての関わりの在り方を教育の観点からの考察に焦点を当てた検証はなされてこなかった。戦間期という予測不可能な時代に展開した新教育運動における「社会への開かれ」と 21 世紀における予測不可能な時代に目指される「社会への開かれ」の異同を精査することで新たな知見を得ることの必要性を感じた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、新教育運動における「社会の変化の受け止め」と「社会への開かれ」を検証することで、予測不可能な時代に効力を発揮する社会との関わりの在り方を教育の観点から考察することにある。考察に際して注目するのは、社会の変化を踏まえた「自己理解」と変化する社会に向き合う「公共心育成」の絡みを検証することである。検証の対象としては、前世紀転換期の新教育運動において社会との相互作用をとりわけ強く意識して考案された労作教育の系譜に位置づけられ今日も存続している学校を選定し、その構想と帰結を精査する。

(2) 本研究で明らかにすることは、大きく二点にまとめられる。第一点としては、新教育運動における社会の変化を踏まえた「自己理解」と変化する社会に向き合う「公共心育成」の絡みを、労作教育を高唱する日本およびドイツの学校における教育の構想と帰結の文脈のなかで分析し明らかにする。分析にあたっては、それぞれの学校において「自己理解」と「公共心育成」がどのように作用することが意図されていたか、そしてその意図が結果的にどのように反映されたかを明確にすることで、社会との関わりの在り方において発揮された効力を浮き彫りにする。第二点としては、労作教育を高唱する日本およびドイツの新教育運動における「自己理解」と「公共心育成」の絡みを、現代における「自己理解」と「公共心育成」の絡みに敷衍して析出することにより、そこに立ち現れる社会との関わりの在り方を精査し、予測不可能な時代における「自己理解」と「公共心育成」の絡みの可能性を教育の観点から検討する。

3. 研究の方法

(1) 検証の中心となるのが新教育運動を源流とし今日も存続する学校であることから、研究の方法は以下の二点を軸とする。第一に、学校訪問も含めた調査旅行で史料収集を行い、第一次史料を分析する。具体的な進め方としては、「自己理解」と「公共心育成」について、前世紀転換期に展開された新教育運動の一端をなす労作教育を核として、「社会の変化の受け止め」と「社会への開かれ」への応答という視点から前世紀転換期の史料からその実態(理念と成果)を分析する。第二に、近年日本およびドイツで出版された新教育運動関連の書籍にあたり、考察の深化を図る。具体的な進め方としては、前世紀転換期における実態を今日の教育という文脈から浮かび上がる可能性と問題点に照らし合わせて検討する。

(2) 本研究の方法は、収集した資料、とりわけ校誌を量的(関連概念の使用頻度)・質的(関連概念の文脈上の含意)に分析することによって、新教育運動における「社会の変化の受け止め」

と「社会への開かれ」を「自己理解」と「公共心育成」の絡みから析出することとする。

4. 研究成果

(1) ドイツ新教育運動における「社会への開かれ」を考察するため、ウアシュプリング学校(ドイツ・シェルクリンゲン)で作業場の活用と職業教育の推進の現状についての資料収集を行うとともに、1930年にウアシュプリング学校を創設したベルンハルト・ヘルの遺稿をシェルクリンゲン資料館で閲覧した。新教育運動の時代(19世紀末から20世紀初頭)に設立された諸学校のうち現在もその新教育運動の精神を継承しつつ教育活動を実施しているという独自性に加え、時代にアピールする教育戦略として職業教育を前面に押し出す方針への転換を推進させていることが明らかとなった。

(2) ドイツ新教育運動における「社会への開かれ」を考察するため、ザーレム城校(ドイツ・ザーレム)における作業場見学・作業場実習参観・作業場関連資料収集をおこなった。収集された資料を分析するなかで、当該校がターゲットとする階層および適正とみなす規模が他のドイツ新教育校のなかでも異色を放っていること、さらに当該校に付設された作業場実習のカリキュラム上の位置づけが「周辺化」と「焦点化」という転換を繰り返しているが、「社会への開かれ」への視点は一貫していることが明らかになった。

(3) 教育史研究図書館(ドイツ・ベルリン)で、新教育運動における作業場・職業教育の変遷についての資料の閲覧と収集を行った。とりわけ新教育運動一次文献(具体的には、ウアシュプリング学校とザーレム学校の史料)を収集した。教育史研究図書館に所蔵されている多数の両校に関する文献を分析することで、両校がターゲットとする階層および適正とみなす規模という観点において異なった展開を遂げたこと、そしてこれに対応して両校に付設された作業場の位置づけに異同が生じていることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 6件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊藤敏子	4. 巻 72
2. 論文標題 変化に应答する「社会への開かれ」志向の教育実践 ザーレム城校における自己理解と公共心育成への取り組みから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 199-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toshiko Ito	4. 巻 10
2. 論文標題 The German concept of Bildung in Imperial Japan. Reception through the prism of the Kyoto School	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal for the Historiography of Education	6. 最初と最後の頁 170-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Toshiko Ito	4. 巻 26
2. 論文標題 Orientierung an der Diversitaet als Norm der Schulerziehung?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Jahrbuch fuer Historische Bildungsforschung	6. 最初と最後の頁 132-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Toshiko Ito	4. 巻 56(4)
2. 論文標題 Love of nation and Heimat-oriented education in Imperial Japan of the 1930s: the rhetoric of Japanese identity in peripheral regions	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Paedagogica Historica	6. 最初と最後の頁 463-480
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 伊藤敏子	4. 巻 71
2. 論文標題 「作業場における活動」と「社会への開かれ」のインターフェイス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 255-267
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toshiko Ito	4. 巻 9 (2)
2. 論文標題 University Ruin and the contested Usefulness of the Humanities in Japanese Higher Education	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Pedagogical Forum	6. 最初と最後の頁 237-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 伊藤敏子	4. 巻 70
2. 論文標題 新教育運動における作業場のレリヴァンス 「社会への開かれ」志向の指標としての職業教育に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 199-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toshiko Ito	4. 巻 10
2. 論文標題 Wandelnde Horizonte des Weltwissens. Zur Raumvorstellung der elementaren Geographieschulbuecher des Japanischen Kaiserreichs	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Educational Media, Memory, and Society	6. 最初と最後の頁 82-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Toshiko Ito	4. 巻 8
2. 論文標題 Religioese Erziehung als ethnische Erziehung? Die wandelnden Grenzbeziehungen zwischen Christentum und japanischer Reichsidee	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal for the Historiography of Education	6. 最初と最後の頁 156-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Toshiko Ito
2. 発表標題 Diversitaet als Norm der Bildungsentwuerfe? Ablehnung und Ambivalenz gegenueber dem Leitgedanken der Inklusion in den Landerziehungsheimen Japans
3. 学会等名 Sektionstagung Historische Bildungsforschung (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshiko Ito
2. 発表標題 Natural Formation of Patriotic Subjects through Local Education?
3. 学会等名 ISCHE (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------